

「正義は最後の勝利であり、その信念を楯として闘ったのである。今もこの信念を楯として戦いつつある。尚将来も正義を味方として永久に戦ふ決心である」。

森永製菓の創業者森永太一郎（1865～1937年）が、昭和4（1929）年から翌5年にかけて『菓子新報』に連載した談話録「今昔の感」の一節である。

菓子業界では常識だった「上げ底」に、太一郎は、余分な材料や運賃を要して、かえってもらった人を不快にするに反対していた。ところが、創業当時、小売店からの要望に、上げ底を施さざるを得なかったことがあり、そのことにつ

森永太一郎の〈おかし〉革命

寄稿 佐賀県立博物館 学芸員 浦川 和也



青年期の森永太一郎

信念を楯として戦う

いて、「今も思ひ出すと胸がムカムカする」「非常なる忍耐を要した」として、冒頭の戦う決意を述べた。連載当時、65～66歳、驚くほど若く、強く、熱い。

太一郎は、慶応元（1865）年、伊万里の陶器商の家に生まれた。幼少期に父母と死別、生別し、親戚の家などを転々とした。13歳の時に豪商の伯父山崎文左衛門に引き取られ、薫陶を受けた。やがて伊万里や横浜の陶器商に勤めた。明治21（1888）年、24歳の時、以前勤めた横浜の陶器商の経営危機を救うため渡米したが、あえなく失敗。無一文になった。その後、太一郎は、日本の子

どもたちにキャラメルを食べさせたいと思い、西洋菓子製造技術の習得のため、足かけ12年、東洋人差別が強かった米国で働いた。

明治32（1899）年6月に帰国し、8月15日、東京市赤坂区溜池町の裏通り「森永西洋菓子製造所」を開いた（森永製菓の創業）。

「菓子と言えは和菓子」の時代に、太一郎と森永製菓は、全国どこでも同じお菓子が買える〈おかし〉文化の時代の端緒をつくった。

機械化や大量生産、先進的な販売戦略と広報戦略等により、製菓業を近代産業に発展させた。まさに、〈おかし〉革命である。

太一郎の人生は波乱万丈。米国修業時代は、「自分の室に帰っては、人知れず独り涙を流したことも屢々あった」という。しかし、太一郎は、逆境の中でも燃ゆる希望は棄て去ることができなかった。使徒パウロの言葉「艱難は忍耐を生じ、忍耐は錬磨を生じ、錬磨は希望を生ず」を引き、「一実成功するもの、将た一生不遇に終るもの、全く其の人の志次第」（今昔の感）と説いた。徹底的に向きだ。

▽生誕150周年を記念した「森永太一郎展」2坪の町工場から始まった〈おかし〉革命は、9月7日まで佐賀市の県立博物館で開催している。入場料は300円。高校生以下は無料。